

IDDNewsletter.....5

2020 May



特集

緊急事態からデザインを思ふ

政府による緊急事態宣言が出てから約1ヶ月が経とうとしています。緊急事態宣言自体は今号の発行直前に全国的に解除になりましたが、北海道は予断を許さない状況が続いています。

新型コロナウイルスという目に見えない怖れとの向き合い方は、不可視な思考や思想の明示化というデザインの方略とも重なる面があるかもしれません。

今回は、知識や技術を身につけることだけでなく、思考の方略自体を学ぶことの重要性について考えてみます。

緊急事態からデザインを思ふ

政府による緊急事態宣言が出てから約1ヶ月が経とうとしています。緊急事態宣言自体は全国的に解除になりましたが、北海道は予断を許さない状況が続いています。

新型コロナウイルスという目に見えない怖れとの向き合い方は、不可視な思考や思想の明示化というデザインの方略とも重なる面があるかもしれません。

今回は、知識や技術を身につけることだけでなく、思考の方略自体を学ぶことの重要性について考えてみます。

この記事を執筆している現在（5月27日）、政府の緊急事態宣言は解除されましたが、道内での感染者は日々一定数発生しており、予断を許さない状況が続いています。報道は、「見えない敵」「見えない恐怖」などと書かれた見出しで溢れ、いつ安心して過ごせる社会が戻るのか分かりません。こうした見通しのない状況は、社会に大きな打撃と恐怖を与えました。

多くの専門家らが、まだ明らかになっていない事由について追求し、これまでの知見の応用や新たな知見を得るための根拠となるデータを積み上げています。ウイルスは肉眼で見ることができないものですが、このような統計学的な分析は、データから客観的にウイルスの特徴や傾向等を知り、高い効果が期待できる治療法を示すことができるなど、「見えないもの」を捉えることが可能です。

対象が視覚から捉えられないものであっても、その構造はいくつかの要素で構成されることが説明できるものであったり、ある繰り返されるパターンから法則を見いだすことができるものであったり、その範囲が限られた枠組みの中で成り立つものであったりする等、規則性や枠組みから全体を捉えることが可能です。むしろ、視覚的に何かが入らなくても、現実を生成することのできる言葉の力を使って不可視な何かを説明可能な対象とすることが「見える」ということなのだと思います。

ものが法則や枠組みをもつということは、即ちデザイン行為そのものです。作品を見て、美しい、きれいと感じるものにも、そこにはデザインによる多くの理論的な背景が組み込まれています。「なぜ、このように配置されている

のか」「なぜ、この配色が選ばれているのか」。それは、一つひとつに根拠を持たせるように設計された集合体です。そうしたプロセスこそ、思考そのものであり、デザインの本質に迫ることができる唯一の方法となるでしょう。

学生に「十字の図形」（図1）を制作するよう課題を出した時、彼らは迷うことなくIllustratorを起動し、作業を始めるかもしれませんが、心がけてほしいのは、なぜIllustratorを使うことを選択したのかということです。十字の図形というものをどのように形状解析し、そのために数あるツールの中から、どのようなアルゴリズムを構築しようとしているのかについて、自分自身で説明できる状態にしてほしいのです。他のソフトウェアとの違いは何なのか。そうしたIllustratorの特性であったり、十字図形の特徴の抽出であったり、あらゆる情報の関連性を組織的に整理し、知識を構造化することが、応用力や論理的な思考力につながっていきます。

例えば、ある幅を持った十字の形の作成を考えてみます。図2は12カ所のアンカーポイントをセグメントでつなげたパスですが、図3は、2つの長方形が midpoint で直角に交わるように回転させて作られています。図4は、midpoint で直角に交わる2本の直線パスの線幅を広げて作られています。それ以外にも、漢字の「十」というテキストデータをアウトライン化し、パスに変換するという手法もあり得るかもしれませんが、いずれの方法も得られる視覚的な結果は何ら遜色ありませんが、その内部の属性は全く異なるもので、正解か不正解かで比較できるものではありません。大切なのは、正しい方法を求めること自体ではないのだと思います。作品という構造体には、表現される形状や材質のみならず、何も記されて



図1 制作課題（十字図形）

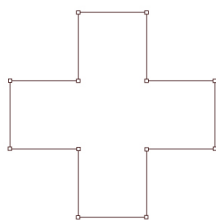


図2 アンカーポイントをつなげて作られている十字図形

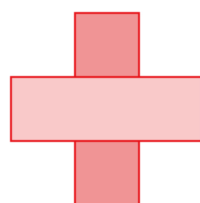


図3 長方形を回転させて作られている十字図形

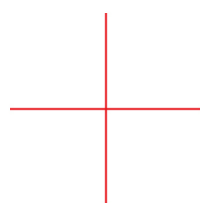


図4 二本の直線パスから作られている十字図形

いない余白までもがデザインの要素の一つとなりえるのですから、それらの全てを言語化し、吟味していくという「思考のプロセス」が大切になってきます。

デザインは目に見えたものの再現ではなく、それ以上の何かに一般化したり、拡張したりしながら、不可視な何かを明示化することに価値があります。情報デザイン科がデザインの学びを看板に掲げている以上、学生には、知識や技術の習得以上に、「思考を深める」ために必要な多くの引き出しを頭の中にたくさん作ってほしいと思います。

本校学生の思考の方略は、デザイン活動において、必ずしも理解の深まりに繋がらないことがあることを私たちは実感しています。ここでは思考とは何かということ自体についての学び、つまりメタ認知についての知見がさらに求められているように思います。学生の理解に向かうための思考の方略の傾向とデザインの間にある何かや、「自己の思考の方略自体の理解」といった事柄を、授業の中でどのように扱っているのかについては、また、別の機会に紹介したいと思います。

IDDN



Contents

2-3

特集

緊急事態からデザインを思ふ

政府による緊急事態宣言が出てから約1ヶ月が経とうとしています。緊急事態宣言自体は全国的に解除になりましたが、北海道は予断を許さない状況が続いています。

新型コロナウイルスという目に見えない怖れとの向き合い方は、不可視な思考や思想の明示化というデザインの方略とも重なる面があるかもしれません。今回は、知識や技術を身につけるだけでなく、思考の方略自体を学ぶことの重要性について考えてみます。

Welcome to Information Design Department!!

北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科「学科だより」
をお読みいただきありがとうございます。

5月末に新型コロナウイルス感染症の拡大による緊急事態宣言が解除されました。本校は、6月1日（月）より授業を再開します。

また、令和3年度（2021年度）専攻科入学説明会は、5月29日（金）～6月8日（月）まで、オンデマンド形式で配信予定です。

まだ全国的に大変な状況が続いていますが、皆様の健康をお祈りするとともに、平穏な日々が一日でも早く戻ってくることを切に願っています。

引き続き、学生の皆様がより学びを深めていけるよう、スタッフ一同誠心誠意指導を行って参ります。

情報デザイン科学科だより

Information Design Department

IDDNewsletter

May 2020 5

IDDNewsletter

May 2020

発行人／北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科「学科だより」編集チーム

発行／北海道高等聾学校

〒041-0261 北海道小樽市銭函1丁目5-1

www.koutourou.hokkaido-c.ed.jp

※ご意見、ご要望などにつきましては、上記 Web ページより電子メールでご連絡ください。

